

## 劉心武の『クラス担任』について

卞 惟行\*

### On “A class Teacher” by Liu Xinwu

Iko Ben

Abstract: Liu Xinwu is the author I studied in my master's thesis and still arouses my deep contemplation. “A class Teacher”, which brought him into prominence, was widely referred to, because of its positive negation of the obscurantist policy in those days when the Great proletarian cultural Revolution was not objectively appraised yet. However, even at present, 30 years since then, still Chinese overnment controls the information, making only the pro-government information be available to the public.

Keywords: Liu Xinwu, *A class Teacher*, Scar Literature

#### 一、傷痕文学

1966年から1976年にかけての文化大革命<sup>1</sup>は、中国共産党、毛沢東が引き起こしたことには間違いなく、その間多くの青少年は「紅衛兵」<sup>2</sup>として利用され、「農民と交流しなければならない」と農村に下放<sup>3</sup>され勉学の機会を奪われた。70年代前半は状況も多少変わり、学生同士の闘争はなくなったが、小中学校において当時のイデオロギーに基づいた教育が行われ、何よりも“革命”が重視された。高等教育機関においても当初は閉校、その後も学生本人の学力ではなく、“成分”（出身）<sup>4</sup>によって所属単位<sup>5</sup>から推薦され、大学に進学することができた。

作家、劉心武は中学校教師だった経験から、1977年に小説『班主任』（日本では、『クラス担任』、『担任教師』と訳されている）を発表。大胆に文化大革命を批判した内容は注目を浴び、この作品は彼の出世作となった。まだ文化大革命（以後、文革）の評価が定まっていなかったこの時期に、それを否定することは大変危険であり、後述する白樺<sup>6</sup>などは、解放軍<sup>7</sup>保守派からの突き上げで、自己批判をさせられ、立場を危うくした。

傷痕文学とは、文革によって心に傷を負った人々を描いた作品群の総称で、劉心武の『クラス担任』から始まり、翌年同様に文革を否定した盧新華<sup>8</sup>の『傷痕』から名づけられた。その後の2～3年は、このような作品が多く発表されたのだが、劉心武自身も、『醒来吧！弟弟』<sup>9</sup>（目を覚ませ、弟よ！）で改めて文革を否定している。

1977年～80年は、毛沢東から後継者と指名され、文革路線そのものは堅持しようとする華国峰<sup>10</sup>と、改革路線へ大きく舵を切ろうとする鄧小平とのせめぎ合いの時期で、鄧小平

---

\* 教養部（非常勤講師）

の側からすれば、これらの作品が発表されることは、都合がよかったのであろうし、鄧が優勢だったので、発表することができたのであろう。

## 二、生い立ちと『クラス担任』

劉心武は1942年四川省成都市に生まれる。幼いころから、中国の古典や内外の小説に親しみ、舞台監督を目指して中央戯劇学院を受験するが失敗、北京師範専科学校に学び、卒業後、北京第13中学11の教師になった。このときの体験が、『クラス担任』の下地になっている。

作品の内容は、不良少年の宋宝琦が盗みで警察に捕まり、在籍する中学校に送られてくる。彼が盗んだものとは、学校の図書館にあった外国の小説で、彼はそれを売りさばこうとしていた。そして「もう二度とこのような、エロ本は見ません」と謝る。クラスの成績優秀な女子学生、謝惠敏は「こんなエロ本を！」と憤り、担任教師の尹達磊が、「それは、名作だ」と言っても、逆に謝は、「では、この本は国が認めたものなのですか！」、「正式に出版されているものなのですか！」と反発する。結局劣等性も優等生も、文革によって同じ価値観を植えつけられている。「四人組に毒された子供を助けなければ！」と尹は心の中で叫ぶ。

## 三、80年代から今に至っても

これは実際私が中国の新聞で見たものだが、1980年代の初め、ある男がハイジャックをして台湾に逃げようとした（成功したか、失敗したかは、覚えていない）。その後家族にも色々害が及んだのだが、このハイジャック犯の妹は、大学に入学することができ、「私のような犯罪人の家族が、大学にまで行けるなんて、みんな偉大な（共産）党のおかげです。私は、卑劣な兄を絶対に許しません。これからの人生を党と人民のために捧げます」というような言葉が書かれていた。

ハイジャックは犯罪で、先進国といわれる国で起こっても、家族は後ろ指を指されたり、もといた場所から引越しを余儀なくされたり、勤め先を辞めたりしなければならないかも知れないが、法律的に家族に責任があるわけではなく、大学受験の資格が奪われることもなく、合否も政府与党が関与するものではない。

魯迅は、中国人の奴隷根性を厳しく糾弾したが、今に至っても「党のおかげで」、「党の指導の下に」などの記事がメディアに躍り、何が正しくて何が正しくないのか、何を見るべきか、何を見てはいけないのかも、みんな党が決めるのである。

中国では中国共産党中央宣伝部（中宣部）が、メディアを統括している。以前私たちの家族の記事が『遼寧日報』に掲載されたことがあるのだが、私たちがしゃべってもいない「社会主義のおかげで」と書かれてあった。或いはハイジャック犯の妹も話していないことを書かれていたのかも知れない。

#### 四、白樺批判

先に述べた白樺の1979年に発表した『苦恋』を元にした映画『太陽和人』（『太陽と人』）は、ある画家が国民党の迫害を受けアメリカに脱出、中華人民共和国建国後に帰国するも、政治運動の中で再び迫害を受け、最後に雪原にクエスチョンマークを描き、両手を太陽（毛沢東を意味する）に向けて死んでいく。画家の一人娘は、文革後に出国を決意し、それを止めさせようとする親戚に、「あなたたちは祖国を愛しているけれども、祖国はあなたたちを愛しているのですか？」と逆に問い直す。

これに鄧小平が「祖国を否定的に描いている」と批判、解放軍の機関紙『解放軍報』が映画のシナリオを攻撃するなど、更なる批判を続け、最終的には白樺が自己批判することで一応の解決を見た。

劉心武の『クラス担任』より描かれてきた傷痕文学の流れが、ここで変わってしまった。

#### 五、劉心武の作風の変遷

劉心武は80年代に入ってから作風が変わり、“叫び”よりも人民の生活の変化や、モラルについての問題提起が多くなってくる。

長編小説『鐘鼓楼』は、1982年12月12日の10時間の間に起きた出来事を四合院の住民を中心にユーモアを交えて描き切り、『クラス担任』と並ぶ、もうひとつの代表作といわれている。

『5・19長鏡頭』（『5・19クローズアップ』）は、ワールドカップサッカー、アジア予選で中国代表が地元北京で格下の香港代表にまさかの敗戦を喫し、その後怒った一部ファンが、外国人に殴りかかったり、車を壊したりし、逮捕された事件が素材で、このような行為を劉心武は嘆き、「もし5・19の、あの試合で会場の中国の観衆は、冷静に“お互いの素晴らしいプレー”に拍手を送り、整然と速やかに、そして笑顔で家路に着いたとしたら、全世界、そして私たち自身も、わが民族に対して、どのような評価を下したであろう？」と締めくくっている。

結末はまるで道徳の授業のようだが、元教師として、青少年の教育を考え、文学の意義は「魂を鍛えるためだ」と述べている。

劉心武は、北京出版社で文学雑誌『十月』の編集担当となり、その後『人民文学』の編集長を務めるが、他人が書いた文章が元で1987年に解任されてしまう。

この頃は、民主化を求める学生デモが相次ぎ、89年の六・四事件<sup>12</sup>に向かって、中国自体が大きな時代の波に飲み込まれていく時代であった。

90年代に入っても劉心武は、『風過耳』、『四牌楼』などの作品を出したが、91年より『紅樓夢』<sup>13</sup>の研究を始め、『秦可卿之死』などを執筆、中央電視台（中央テレビ）で、『紅樓夢』の講座を行い、現在では“紅学家”<sup>14</sup>として、その名を知られている。

#### 六、バランス感覚

『クラス担任』で、宋宝琦や謝惠敏が、「エロ本」と名指ししているのは、アイルランド出身のイギリス人女流作家、エセル・ヴォイニッチ 15 の名著『牛虻』16 である。東京大学の藤井省三教授は「しかしいまだに差し障りがあるかも知れぬ毛沢東時代初期の作品ではなく、前世紀西欧革命文学の傑作を小道具に用いたところに、作者の苦心がうかがえよう」と述べている。

この『牛虻』は、日本でも 50 年代左翼青年の必読の書であったが、文革時、中国では、ほとんど全ての外国の書が禁書になっていた。

『愛情的位置』は、25 歳の孟小羽は文革によって鍛えられた（と本人は感じている）。四人組によって偏った教育を受けたが、これからの社会に希望を持っている女性である。彼女はバスで知り合った男性との恋を、これからの新時代の青年として社会主義建設に加わる中で、どのように位置づけるかを考える。

この時期の中国では、大学生の恋愛は御法度。恋愛を題材にした小説、映画もほとんどなかった。逆に「共産主義」、「革命」などの勇ましい言葉が出てくるのは、時代を感じさせるが、四人組を批判する一方で、「毛沢東語録を購入する」、「周恩来の追悼式に参加した」などの描写が見られ、ちゃんと中国共産党に配慮がなされている。

劉心武は、よく問題提起の作家だといわれるが、はっきりとした結末がない作品が多い。やはり、先に述べた白樺のように、“結末”まで書いてしまうと、後でどのような災いが待っているか分からない。白樺は、自己批判で済んだが、文革時に命を落とした作家も少なくないのだ。

かつて「人民文学の星」といわれた趙樹理 17 は、文革で紅衛兵のリンチに遭い命を落とした。著名な作家、老舍 18 も紅衛兵の暴行を受け入水自殺した。（なぶり殺しに遭ったという説もある）

文革は四人組の責任とは言っても、結局は中国共産党が発動した政治運動であり、権力闘争である。今ある価値観も右と左、どちらに転ぶか分からない。

先日、重慶市党委員会書記だった薄熙来が解任された。彼は保守派といわれ、「唱紅歌」（革命歌を歌おう）のキャンペーンを行い、重慶のテレビでは毎日「革命歌」が流されていたが、彼の失脚によって現在は、週一回に減らされたそう。薄熙来は文革礼賛派で、それを思い起こさせる「革命歌を歌おう」キャンペーンに改革推進派の胡錦濤、温家宝の現政権は、よく思っていなかったとも伝えられる。

権力争いが文学、メディアにも大きな影響を及ぼす現状では、古典の研究を行っている方が安全なのであろう。

しかし『クラス担任』は、現在の若い世代にとって、作品の内容自体、面白くもないであろうが、文革の評価が定まっていない時期に言葉を選びながらも、文革を否定し、新しい時代を切り開いたという点で文学史の面から高く評価されている。

七、最後に

2008 年の四川大地震で、余秋雨は自らのブログで「外国の口車に乗って、政府を攻撃すべきではない」と述べ、逆に多くのネットユーザーから「御用文人」と罵られ、20 万元寄付したのも実はウソだったと暴かれた（別の報道では、20 万元以上寄付したとある）。その後、彼に対する批判の書き込みによって、彼のブログは炎上した。

このように、許される範囲での不満を口に出すことは可能だ。現在中国では、インターネットが普及し、多くの人が国外に旅行するようになり、以前と比べて格段に情報を得やすくなっている。日本でも多くの人が、インターネットが中国を変えると述べている。しかしネット警察が絶えず目を光らせて、例えば「六・四」、「法輪功」<sup>19</sup> などの単語は、検索できないようになっている。

日本在住の中国人、陳惠運氏は、中国人は支配されたがっているとし、「中国人は現在にいたる数千年もの長い歴史のなかで専制政治以外を経験したことが一度もなく、民主主義も議会政治もまるで知らない。海外生活経験者などごく一部を除けば、中国人にとって独裁者に統治されるのは生まれながらにしてごく自然なことであって、水や空気のようにあって当たり前のことなのである」、「中国人は過去に固執し、習慣に拘泥する性癖がある。これが中国人の民族性であり、伝統は容易に覆らないと言ったのはこの意味である」と述べている。

私の以前書いた文章に関して、知り合いのある中国人女性から、「あなたは、どうしていつも中国の悪口を言うのですか？ 自分の母親を悪く言われたらどう思いますか！」と責められたことがある。この女性は修士号を持ち英語も日本語も堪能で、外国に対する知識も豊富なはずだが、中国のメディアが伝えることのみが正式解答で純粹培養されているなど感じ、『クラス担任』の中の謝惠敏を思い出した。

彼女は、まさに陳惠運氏のいう支配されたがっている人ではないだろうか。

引用文献：

『中国語圏文学史』 藤井省三 東京大学出版会 2011 年

『我是劉心武』 劉心武 團結出版社 1996 年

『中国は崩壊しない』 陳惠運、野村旗守 文芸春秋 2009 年

注釈：

1、文化大革命：名目上は社会全般にわたる改革運動だが、実際は毛沢東が復権するための大規模な権力闘争。

2、紅衛兵：1966 年から 1968 年にかけて実権派打倒に猛威を振るい、文革期間中の死亡行方不明者（数百万人とも数千万人ともいわれる）の一部に加担したといわれる。

3、下放：文革時、毛沢東によって行われた思想政策。青年層が地方の農村で働き、肉体労働を通じて思想改造をしながら、社会主義国家建設に協力することを、その目的としたが、この下放によって、多くの青年層が教育の機会を失い、中国の教育システムならびに学問は崩壊し、下放を受けた世代は無学歴、低学歴という状況が顕在化した。

4、成分：階級区分。貧農、労働者などは良く、地主、資本家などは悪いとされた。

5、単位：所属する学校、会社などの機関。

6、白樺：(1930～) 河南省出身。

7、解放軍：中国人民解放軍＝中国の軍隊。

8、盧新華：(1954～) 江蘇省出身。現在はアメリカで暮らす。

9、『醒来吧、弟弟！』（『目を覚ませ、弟よ！』）1978年の作品、文革で世の中に失望した弟とそれを案じながら見守る兄の話。

10、華国峰（1921～2008）山西省出身。国務院総理（首相）、中国共産党中央委員会主席などを務める。

11、中学：中国では初級中学（日本の中学）、高級中学（日本の高校）、合わせて中学という。

12、六・四事件：日本では天安門事件といわれる。1989年6月4日、軍が民主化を要求する学生、市民に発砲。死者、行方不明者の正確な数字は分からない。

13、『紅樓夢』：中国四大名著の一つ。

14、紅学家：『紅樓夢』の研究者のことをいう。

15、エセル・ヴォイニチ：(1864～1960) アイルランド出身のイギリス人。1920年以降はアメリカで暮らした。

16、『牛虻』：日本では、『あぶ』、『馬あぶ』と訳されている。1928年、1955年、1980年と三度にわたって映画化されている。

17、趙樹理：(1906～1970) 山西省出身。毛沢東の「文芸講話」の精神を体現する「農民作家」として知名度を獲得していたが、文革時に反動派とされ、紅衛兵の暴行を受け死亡。

18、老舍：(1899～1966) 北京出身、満州族。北京の町をこよなく愛し、「人民芸術家」、「語言大師」と称された。文革で犠牲になった代表的な著名人。

19、法輪功：気功集団。中国では邪教と見なされ、合法的に活動できない。

(平成 24 年 3 月 31 日受理)